

常なる磐

つねなる いわ season II

令和 4年 2月 4日(金)

その2

◇ 学校【沿革史】を紐解いて⑥ 児童数と学級数 R3.1.2.3 85号と部分重複



安戸地内から米河内地内への校舎新築・移転は、昭和 62 年度から。昭和 62 年度直近の児童数は、**46→55→47→47→48→47→56→49→57→63** 学級数はいずれも **4**。つまり【複式学級】である。

新築・移転に伴い、学区の改変が行われ、米河内の児童の通学により、児童数が倍増し、複式学級が解消される。平成 9 年度には 149 人と、最大数であった大正 3 年度の 161 人に迫る勢いがあった。

ところが、この平成 9 年を境に児童数は徐々に減少し、現在は児童数 49 名と 1/3 に。

注目していただきたいのが直近 10 年の児童数。

63→53→48→51→48→49→45→45→46→47

上記の黄色帯の数値と変わらないどころか、近年の方が児童数は少ない。それでも**単年学級で 6 学級**あるのには理由がある。

赤枠を見てほしい。昭和 43 年に複式学級となって以降、その状態は 19 年連続である。複式学級は、法律の定める規定をもとにしながら、岡崎市が把握する生来的な入学児童数の見通しをもとに開設が検討される。つまり、「来年は複式、再来年は通常、その翌年は複式」という混乱を避けて開設する。それが 19 年連続の理由である。

法律的には、【2 個学年の児童数が 16 名以下】とある。ただし、1 年生を含む複式は 8 名以下。

今年はすべてクリアだが、来年は新 3・4 年生が 15 人。けれども、その後の見通しと愛知県の特別措置により、複式へは移行されないわけだ。

令和 8 年度には、いよいよ児童数は 30 人台へ。それでも単学級が確保される。大変大変有難い。